

第7回: 人生のアーキテクチャ

翌日、翔太は西園寺玲子のもとを訪ねていた。プロジェクトの報告をするはずだったが、憔悴しきった彼の顔を見て、玲子は予定を変更した。

「ずいぶんひどい顔ね。プロジェクトは順調なんでしょう?」「...仕事は、なんとか。でも、もっと大事な基盤が揺らいでいます」翔太は、家族との一件をぽつりぽつりと話した。プロとして私情を挟むべきではないと分かっていたが、今の彼には、玲子以外に「構造的なアドバイス」を求められる相手がいなかった。

玲子は黙って聞いていたが、ふと一枚の紙を取り出し、円を描いた。「あなたはビジネスアーキテクチャにおいて、『リソース(資源)には限りがある』という原則を学んだはずよ」彼女は円を「仕事」「家庭」「自分」「睡眠」に分割した。「多くのビジネスマンが勘違いしているわ。『仕事の成果』を最大化することが、人生の全体最適だと。でも、BAcの視点で見れば、家庭という『バックエンドシステム』がダウンすれば、仕事という『フロントエンド』もいずれ停止する。相互依存関係にあるのよ」

「どうすればいいんでしょうか。仕事の責任も、家族への責任も、どちらも減らせません」「いいえ、減らすのよ」玲子はきっぱりと言った。「プロジェクトで要件が溢れた時、あなたはどどうする?『スコープ(範囲)』を調整し、本当に重要な『コア価値』に集中するでしょう? 人生も同じよ。全てを完璧にやろうとするのは、機能過多のシステムと同じ。必ずバグが出るわ」

その言葉に、翔太はハッとしました。彼は「スーパーパパ」であり「スーパービジネスアナリスト」であろうとしていた。しかし、それは設計ミスだったのだ。

その日の午後、翔太はプロジェクトオーナーに直談判に行った。「現在の要件を全て満たそうとすると、現場が疲弊し、品質リスクが高まります。リリースのスコープを見直させてください。『食を通じたQOL向上』というコア価値を実現するための機能に絞り込みましょう」それは勇気のいる提案だったが、オーナーは翔太の真剣な眼差しを受け入れ、承認した。

そして夜、早めに帰宅した翔太は、麻美と菜々美に向き合った。「ごめん。パパは、大事なことを見失っていた」彼はポケットから手帳を取り出した。そこには、仕事の予定だけでなく、家族との時間を「確保すべきリソース」としてブロックした、新しいスケジュールが書かれていた。「これが、これからの僕たちの『設計図』だ。仕事も頑張るけど、この時間は絶対に君たちのために使う。約束する」

菜々美はおずおずと、翔太に抱きついた。「パパ、もうバツ印つけない?」「ああ、二度とつけさせないよ」

翔太の手の中に、再び二つの羅針盤が戻ってきた。一つはビジネスを導く羅針盤。もう一つは、人生という航海を家族と共に進むための羅針盤。二つが指し示す方向が一致した時、彼の迷いは完全に消え去った。